

齋藤修二先生 ～マイクロ波分光、星間分子～

高野 秀路 (日本大学工学部 総合教育 物理学教室)



古希のお祝いの時の齋藤先生
(2009年3月5日、富山大学 小林かおり氏提供)

齋藤修二先生が、8月31日に逝去されました。先生は分子研で助教授をされ、名古屋大学理学部に移られ、そして再び分子研に教授として戻られました。1999年に分子研を定年退職されたあとは、福井大学遠赤外領域開発研究センターに移られました。

先生は、不安定分子の回転スペクトルの専門家として、分子構造の研究に大きな足跡を残され、国際的にリードされました。さらに、日本の電波天文学の発展の初期から、星間分子に強い関心をお持ちでした。宇宙電波観測の関係者からの絶大な信頼を得て、天体からの未同定スペクトル線についての重要なアドバイスをされ、実験室で星間関連の分子の実験を行い、また、自ら電波望遠鏡を用いた観測をされました。

さらに、東京大学の山本智さんらと共同で、富士山頂にサブミリ波帯の電波望遠鏡を設置され、492 GHzにスペクトル線を持つ中性炭素原子の分布の観測を実現されました。この望遠鏡の開発は、現在稼働しているアタカマ大型ミリ波サブミリ波干渉計（アルマ望遠鏡）に日本が参画するに当たっての、サブミリ波受信機などの技術面での基礎にもつながりました。先生は、1991年に仁科記念賞、2000年に紫綬褒章、などを受賞され、天文、物理、化学の間の学際的な分野で高い評価を受けられました。福井大学をご定年後は、お会いする機会は減りましたが、研究に関心を持ち続けていらっしゃいました。

齋藤先生と私の縁は、私が大学の学部生のころにさかのぼります。宇宙誕生から生命の進化までの、いわゆる物質の進化に関心があったため、学部の友人らとともに、分子研を訪問させていただきました。その際、先生が実験されているところにお邪魔して、お話を伺いました。関連の研究会でもしばしばお姿を拝見し、星間分子関係の物理化学側の代表的な存在でした。

その後、1988年から名古屋大学の大学院生として、1991年から分子研でご指導をいただき、大変お世話になりました。先生から教えていただいたことを改めて振り返ると、色々な雑用がある中で研究に集中すること、頑固なまでに自分の道を進むこと、実験などで見通しが見つからない時はあっさり諦め、別の方法を探ること、などが挙げられます。自分の状況を振り返るとなかなか実行できておらず、現在でも心すべきこととして、身が引き締まる感じがしております。

研究室外でのいくつかの思い出としては、名古屋大学のときに、ハワイのマウナケア山にあるJCMTサブミリ波望遠鏡と一緒に観測に行ったこと、また、分子研の研究室の遠足で、下見も兼ねて富士山に登ったことが挙げられます。先生は、山歩きがお好きでしたので、山は慣れていたと思います。ただ、マウナケア山は大変なだらかなため、車で4200 mの山頂まで登れ、ほとんど山登りをする必要はありませんでした。さすがに富士山では、皆それなりに苦労していましたが、先生はお元気に登られ、健脚なところを発揮されていました。先生、これからは、どうぞ安らかにお休みください。